

(報告書)

19 世紀イギリスのダンディズムにみるたばこ文化

助成研究者 泉 順子 ((明治大学) イギリス文学・文化)

共同研究者 佐藤寛子 ((国際医療福祉大学) 英・仏世紀末文学・文化)

1. 目的

本研究の目的は 19 世紀のイギリス社会で生まれたダンディズムのたばこ文化をたどるものである。ダンディたちにとってたばこは重要な嗜好品であったにもかかわらず、これまでに発表された先行研究ではダンディズム文化におけるたばこについての具体的で実証的な検証が乏しい。この点に留意しつつ、本研究では 19 世紀のイギリス社会におけるダンディの社会的位置づけと精神性を確認したうえで、彼らのたばこ文化を詳細に調査し、その審美主義との関わりを明らかにし、さらに当時のブルジョア階級に与えた社会的影響力を考察する。

ダンディズムとはもともと、18 世紀末から 19 世紀前半にかけてロンドンの都市貴族によって創出された美意識のことを指すが、19 世紀末になると「衰退の美学」を標榜する芸術家たちによって再評価された。この間イギリスでは、フランス革命と産業革命という歴史的な大事件を契機に、ブルジョア階級が急速に力を伸ばし始めていた。道徳的で規律正しい生活と勤労という現代的な倫理観の中に自らのアイデンティティを確立させたこの新興階級が社会の中心になりつつあったその一方で、ダンディたちは世間の流れに逆らうかのように無駄と無為をよしとするライフスタイルやおしゃれを追及した。こうした姿勢には、大量生産や効率化に向かう画一的な大衆社会への批判精神が流れており、ダンディであるとは、単一の、代替できない個人性を殊更に意識する姿勢を貫くことを意味するようになった。

逆説的にも、ダンディズムは当時のイギリス社会に幅広く浸透していく。その背景には、ダンディズムが批判した当のブルジョア階級が積極的にダンディのファッション・センスや美的感覚を生活に取り入れようとしたことがあった。ダンディはその独特なライフスタイルと主義によって象徴的な権力を獲得した「新しい貴族」とみなされ、彼らが考案したファッションや喫煙道具をはじめとする小道具は模倣の対象として流行となり、「貴族然とした、優美な、上品な」といった表現が好まれるようになった。

この浸透過程で重要な役割を果たしたものの一つがたばこである。このことを、本研究は次の3点から検証した。一点目はイギリスのダンディズムには「劇場性」という特質があり、見かけが全て、という審美主義がブルジョワ階級による「貴族趣味」を肯定することになったこと。二点目はこの劇場性に喫煙行為とたばこの小道具が意識的に加えられたことで、ダンディの反大衆化のメッセージや大量生産・効率化へのアンチテーゼ、没個性と画一化にすすむ社会への批判精神がより顕著にみられると同時に、ダンディの個人主義がブルジョワ階級に対する教育的役割も果たしていたこと。三点目に、ダンディズムがブルジョア階級に与えた影響力の大きさは、当時の雑誌記事やブルジョア階級のライフスタイルから読み取れること、以上を明らかにすることを本研究の目的とした。

2. 方法

主に一次資料（文学作品、雑誌、新聞記事、絵画・写真）の調査・収集・分析と二次資料（先行研究、文学作品の評論、伝記、歴史書、本研究のテーマに関連した文献）の収集・読解と整理を行い、実証的に検証することを心がけた。一次・二次資料ともに日本とイギリスにて収集した。

文学作品は19世紀末にダンディズムを再評価した Oscar Wilde (1854-1900)、Max Beerbohm (1872-1956) や当時の上流階級の暮らしを克明に描いた William Thackeray (1811-1863) の作品に焦点を当てたが、研究の進行過程で本研究にとって有意義な知見を与えると考えられる作品を新たに発見した場合には、積極的に研究内容に加えることとした。各作品に四散したたばこの描写を拾い上げ、それに込められたメッセージ性を読み解くには時間を要し、時にはそれが本研究の対象にはならないことが分かり、新たな文献を探すということも少なからずあったが、時間的制約のなかで地道な作業を行った。

19世紀のイギリスにて発刊された雑誌・新聞記事の多くは日本で入手することが困難だったため、主に大英図書館所蔵のデータベースで幅広く検索した。*Gentleman's Magazine*、*Cornhill Magazine* をはじめとして、当時のイギリスの上流階級ならびにブルジョア階級に愛読されていた雑誌・新聞記事について可能な限り目を通し、散見しているたばこに関する記事や宣伝文、エッセイを収集し検討した。絵画と写真は大英図書館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下V&A美術館）、ナショナル・ポートレート・ギャラリー収蔵の作品および参考資料の文献から集めた。本報告書に紹介・掲載されているものは、その一部となる。

先行研究は主にダンディズム論、階級論、19世紀イギリス史に関する文献とたばこ文化についての研究資料から成る。加えて研究対象となる人物の評伝も検討した。

3. 研究計画と実施状況

概ね当初の計画に沿って研究を実施することができた。2013年4月から8月にかけては日本国内にて研究を行い、本研究に必要な文献資料の収集とその資料の読解・分析を行った。9月に佐藤が大英図書館とV&A美術館にて、日本では入手困難な資料（文学作品とその評論、雑誌・新聞記事、19世紀の服飾・たばこにまつわる資料）を収集しつつ、研究に有益な資料を新たに探し出した。夏以降はイギリスで得た資料も加えて文献と画像資料の読解と分析をさらに進め、10月に中間報告書を作成、そのなかで①イギリスのダンディズムに特有な傾向として「劇場性」がみられること、②WildeとBeerbohmの作品と伝記の分析と整理を行ったこと、③19世紀イギリスのたばこの社会史・文化史を詳細に作成し、たばこの社会的位置づけを確認したことを報告した。中間報告書についてのコメントも十分に留意しながら、11月から2月にかけて研究を進めたところ、あらためて必要な資料があることが確認され、2月に佐藤が再度大英図書館にて資料収集を行った。

4. 研究成果

4-1. ダンディのたばこと手回り品の歴史——スナッフ、シガー、シガレット

19世紀は実に様々なたばこ文化が錯綜した、豊かな時代である。この時代はスナッフ（嗅ぎたばこ）、パイプ、シガー（葉巻）、シガレット（紙巻きたばこ）という4種類のたばこの喫煙がみられた時期であり、それぞれに特有なたばこ文化が生まれている。そしてたばこの選択は、喫煙者の属する社会階層はもちろんのこと、個人的な嗜好、政治的立場、美意識にも深く関わっていた。喫煙者の層も広がり、元来は上流階級が特権的に嗜むものであったたばこは、19世紀後半には労働者階級や女性にまで幅広く浸透した。とはいえ、たばこそのものをイギリス社会が常に肯定的に受け入れたわけではなく、たばこ文化の浸透とともに、喫煙行為を悪習・悪徳として忌避する態度・運動もみられた。

なかでも19世紀に活躍したダンディが愛したたばこは、スナッフ、シガー、シガレットとなるため、これらについての歴史を踏まえておく必要がある。山田勝の『ダンディズム』（1989）ではダンディの嗜むたばこは「19世紀初期は葉巻、世紀末は紙巻」とあるが、それにスナッフも付け加えるべきであろう（52）。19世紀にはパイプも幅広い社会階層で愛されていたが、貴族・上流階級の社会ではパイプはむしろ下品で粗野なものとみなされていた。このことはダンディの典型となったGeorge Brummell (1778-1840)を庇護したGeorge IV（在 1820-30）の時代に既にみられることであり、後述するようにこの頃のたばこ文化といえばスナッフであった。Alfred Dunhill の *The Gentle Art of Smoking*

(1961)によれば、18世紀初頭の下町のコーヒーハウスでは同じ蠟燭でパイプに火をつけることが「親交と友情」の証となるのに対し、貴族・上流階級の人々が集うセント・ジェームズ・パークの上品なコーヒーハウスでは「まるで香水屋に立っているかのような雰囲気があった。香料をふんだんに配合したスナッフを除いては、たばこはおしなべて嫌悪の対象となっていた」ようである(18)。19世紀中葉になっても、たとえ個人的にパイプを嗜むことがあったとしても、それを公に晒すことはタブーとされていた。そのことを裏付ける作品の一例として、Thomas William Robertson (1829-1871)の喜劇*Society* (1865)がある。この作品では上流階級のダンス会場でポケットからパイプを落としてしまい、周囲の冷たい視線に耐えられず赤面する男性の様子が描かれている。当時の貴族・上流階級の暮らしを克明に描いたThackerayの*Vanity Fair* (1847-8)でも、ロンドンのジェントルマンズ・クラブで嗜まれているのはシガーか両切葉巻(cheroot)が圧倒的に多い。加えて、上流階級のマナーハウスを数多く手がけた当時の建築家Robert Kerr (1823-1904)が*The Gentleman's House* (1871)で記しているところによると、スモーキング・ルームは「ジェントルマンがシガーを吸うため」(129)とあることから、当時の貴族・上流階級の世界でパイプは(個人的な好みはともかくとして)暗黙裡に除かれていたことがうかがえる。

18世紀後半から19世紀初頭にかけて活躍した初期ダンディたちが愛した、嗜好品としてのスナッフがイギリスに導入されたのは、長らくフランスに滞在していたCharles II (在1660-85)がイギリスに持ち返ったことがきっかけだとされている(アイルランドではフランスから導入される以前にスナッフが使用されていた)¹。1660年にCharles IIが王政復古を遂げてから、イギリスの宮廷でフランスの様々な習慣を模倣することが流行した。なかにはスナッフも含まれ、瞬く間に貴族・上流社会で愛用されるようになった。手本となったフランスでは、スナッフの文化が芸術の域にまで高められ、優美な服装、繊細な香り、洗練された作法、巧緻な職人技術という文脈に位置づけられた²。イギリスでも、スナッフはMary II (在1689-1694)とQueen Anne (在1707-14)の時代を経て洗練さに磨きがかかるが、その後ろ盾には流行の最先端を走るダンディたちがいた。大方が貴族・上流階級

¹ もともとタバコの粉末を指す“snuff”という言葉は、17世紀中葉にヨーロッパに持ち込んだオランダ人の言葉であったといわれている(Dunhill 1961:102-3)。この頃はタバコは薬草の役割が強く、スナッフは止血剤または覚醒剤として医師が処方する薬であった。この薬草としてのスナッフについては、たばこと塩の博物館編『嗅ぎたばこ入れ』(2013)に詳しい。

² こうしたフランス宮廷文化の影響を受け、イギリスの貴族・上流階級でも洗練することは富と権力の証とされ、スナッフと共に英国風の男性モードの成立が国益をかけて目指されるようになった。

に属していたダンディの階級意識をみれば、スナッフは日常生活の一コマを形成する嗜好品でありながらも、自らの体面、地位、品格を公に示す重要な小道具であったことが分かっている。当時の様子についてDunhillは次のように描いている。

伊達男達は自分で嗅ぎたばこを挽く風習を生み、そのためには驚くほど色々な道具一式を持ち歩いた。先ず「carotte」と言われる固く撚った煙草。次に木製のおろし具で、一方の端に粉になった嗅ぎたばこを受ける木鉢のついた、台所用のナツメグ挽きに似たもの。それにもう一つは嗅ぎたばこ入れで、見事な宝石をちりばめ、飾りが付いており、それを取り出す時は気取った身振りで、すんなりした指に嵌めた幾つもの指輪をきらめかせたものであった。蒐集した立派な嗅ぎたばこ入れの品々から推して、彼等の持ち歩いた道具には更に素晴らしい物があつた事がわかる。それらは、おろし具の目立てに使う銀か何かの針、それが曲がったのを叩いて直す鎚、嗅ぎたばこを精撰する篩^{ふるい}、その際に使う匙、その他もろもろである。上唇に付いた嗅ぎたばこを払うのに使うための野兎の足の様なものさえ現れた。（團伊玖磨訳 134）

さらに同書ではダンディたちが細見の杖の透かし彫りの握りにスナッフを仕込み、鼻に近づけては香りを楽しみながら得意げに持回っている姿が紹介されている（103）³。V&A美術館には当時使用されていたスナッフラスプが所蔵されており、スナッフにまつわる小道具の多くが希少価値の高い素材で製造されたために高価であったことが説明されている。見かけとポーズに余念がないダンディにとって、スナッフという嗜好品を楽しむこと自体も自らの鑑識眼を周囲にひけらかすための方術であり、スナッフの洗練された香り、厳選された優美な宝飾品で彩られた高価で精巧な道具は、単なる実用性以上の目的を持っていたことは明らかである。

貴族・上流階級に愛されたスナッフの小道具の芸術的価値は圧巻である。『嗅ぎたばこ入れ』によると、イギリスのスナッフ文化の手本であったフランスでは 17 世紀に金台にエナメル仕上げをし、そこに種々の宝飾を施した「ゴールデン・ボックス」と称される燦爛たるスナッフボックスが作られており、イギリスでも当然のことながら類似したボックス

³ 当時は女性もスナッフを嗜んでいたが、なかにはマナーに欠く女性もいたようである。1712年の *Spectator* では、淑女にみられるスナッフの習慣には行き過ぎもあり、嫌悪すべき行為であると論難されている（Dunhill 1961:104）。ダンディという男の美学を浮き彫りにするために、こうした女性の振る舞いを対照的に比べる記述もあった。



図 1

が製作された(8)。その多くは精巧な細工が施され、ダイヤモンドやエメラルドなどの宝石が嵌め込まれたり、カメオや、金銀、各種の貝殻で細工されたものなどがあつた。写真(図1)の卓上用血石スナッフボックスは現 Elizabeth II (在 1952-) のウィンザー家所蔵の卓上ボックスである(*Royal Treasures* 329)。スナッフボックスの熱心なコレクターとして名高かつたプロイセンの君主 Fredrick II(在 1740-86)が外交の贈答用にあつらえたものだとされている。3000個のダイヤモンドがちりばめられ、金箔は上品な金色とピンク色で輝いており、蓋には花やトンボの模様が宝石で描かれているこの箱の意匠はイギリス王室コレクションのなかでも一際目を引き、職人技の技巧の高さはもとより、当時の王族・貴族階級にとってのスナッフボックスの価値の高さを裏付ける。

スナッフが微粉末状になって専門業者により販売されるようになると、持ち歩きに便利な容器が求められるようになり、卓上用のボックスに加えて携帯可能なサイズのものが作られるようになった。当時の胴衣のポケットに入りやすいように、直径 10~12cm の長方形と円形が多い。スナッフは赤葡萄酒と同じように、少し暖めたほうが風味がよくなるとも考えられていたようで、赤金や純金素材の薄手の箱が一部の人に好まれたそうである(Dunhill 1961:109)。

ダンディにとって、携帯用のスナッフボックスの蓋は「趣味のいい男性」(“a man of taste”)の象徴と考えられていた(Scott 24)。一般的にはシルバー製が人気で、上流階級の裕福な人々のためには高額な象牙や鼈甲製のものも作られた。ダンディ王の George IV は自分の名前にちなんだスナッフのブレンドも作っていたが(*Royal Treasures* 321)、本人はスナッフそのものよりも、それを入れる容器の質と技術にもっぱら関心を寄せていたらしい(Parissien 169)。彼は王室専属の宝石細工・金細工師 Philip Rundell (1743-1827) によるスナッフボックスを中心に 324 箱収集していたといわれている(*Royal Treasures* 321)。彼が容器の外観に強いこだわりを見せたのも、彼を取り巻くダンディとの美の競演が背景にあったはずで、当時の貴族・上流階級にとってスナッフボックスはその人の地位、美意識、人格など全てを物語るに等しかった(Brooks 163)。

スナッフボックスが実用性よりも装飾性としての意味合いが強かったとはいえ、王族と貴族階級にとっては、巧緻に贅を極めてつくられたスナッフボックスは外交交渉でも重要な役割を担っていた (*Royal Treasures* 321)。この一例として、George IV が 1820 年の戴冠式に廷臣に贈ったスナッフボックスがある。装飾技巧は贈られる人の身分・立場によって加減されたが、この金箔の鼈甲のスナッフボックス (図 2) は当時スナッフボックスの製作者として



図 2

として名高かった Alexander James Strachan (fl. 1799-c.1850) の作品とされている (*Royal Treasures* 321)。このボックスの蓋には王の肖像を浮き彫りにしたメダルがはめ込まれており、その周りには王家の紋章も施されている。この戴冠式では外国の使節にもスナッフボックスが下賜され、その経費に当時にして 8,205 ポンドも費やされたという (『嗅ぎたばこ入れ』9)。スナッフボックスは日常生活においても友情の証として贈り物になることが多かったが、一個人の地位や体面を超えて、一国の地位と外交手腕を担う重要な小道具でもあった。

貴族・上流階級で愛されたスナッフも、やがて時代の波にあらがえずに衰退を迎えるが、きっかけは 19 世紀初頭のシガールの登場であった。半島戦争 (1808~14) でイベリア半島に遠征したイギリス軍が、スペインとポルトガルの兵士たちからシガールを教えてもらい、本国に持ち帰ったといわれている。

Dunhill (1961) によれば、イギリスにシガールが初めて紹介されたのは 1814 年である (32)。シガールは瞬くまにイギリスの社交界、上流階級の間で流行した。当初、シガールに課せられた税金が高率だったために、シガールを手にする層が限られていたが、1829 年に税法が改正されて、シガールの税率が引き下げられると、スナッフを愛用していた人達も一気にシガールに魅了された (Dunhill 1961: 19)。George IV が最厚にしていたスナッフの店 Fribourg & Treyer の記録によると、1820 年頃の同店でのシガールの販売量はスナッフの 10% 程度であったにもかかわらず (Evans 13)、1850 年代からシガールの売り上げは急速に伸びたようだ (Evans 35)。シガールの大流行の煽りを受けて、ロンドンのクラブには喫煙室が設けられ、スナッフの販売量の方は急速に減った。また 1840 年頃にはシガールを生産する小規模の工場がイギリスに登場し繁盛したようである (Dunhill 1961: 96)。

シガーがより好まれるようになった文化的背景には、ヴィクトリア時代に芽生えた道徳観・公衆衛生観も大きく関与していたらしい。清潔で真っ白なハンカチが重宝されたヴィクトリア朝社会では、スナッフを嗜むのに便利な汚れが目立たない派手な色のハンカチは好まれなくなった (Dunhill 1961: 107)。



図 3

シガーの流行にともない、シガーラベル (cigar label, cigar bands) (図 3) も登場し、ヴィクトリア朝の若者が競って収集した (Grossman 68)。Amoret Scott (1981) によると 1840 年代にはシガーケースもたくさん生産されるようになる。安価な木製がもっとも人気であり、これには黒色の

転写印刷が施されていた。格子縞を基調にした Mauchline もまた非常に人気であった。1850 年代になると金箔で装飾された革のケースも多くつくられ、象牙と鼈甲製の贅沢なケースもあった。19 世紀後半になると、張子紙製のシガーケースもつくられるようになり、戦争、美女、田舎の風景、当時の有名人などの絵が描かれていた。黒と金でシンプルに“cigar”と印字されたケースも流行ったようである (Scott 29)。

シガーを吸うための小道具は、その人の嗜み方や用途によって様々に作られた (Scott 30)。カッターはシルバー製が多く、ミニチュアボトル、指、動物の頭などのような奇を衒うものまであった。シガーホルダーはどちらかという装飾的意味合いが強く、海泡石、角、鼈甲、琥珀製の高額なものから一般向けの木製のホルダーまで幅広く作られた (Scott 30)。

パイプ、シガー、シガレットの登場で火を用いる頻度も増し、そのための小道具も盛んに生産されるようになった。1827 年に John Walker の摩擦マッチ (Chemical Friction Lights) が発明されると次々にその模倣品が製造され、Samuel Jones の「黄燐マッチ」や Watts の「塩素酸塩マッチ」などが有名である (Scott 19)。とはいえこれらは喫煙者向けにデザインされておらず、1832 年に Jones が特許を出願したマッチが喫煙者向けの本格的なマッチと目されている。シガーがイギリスで流行するとドイツ製のマッチがシガータップ (cigar tip) またはシガーキャップ (cigar cap) として有名になった。1849 年になると、これまで以上に安全なシガー用マッチ (vesuvian) が考案され、“Flamers” や “Crystal Lights and Flaming Fusees” 等のブランド名で販売された (Scott 20)。1830

年代には“Congreves”という名前の、頭薬をどこにこすりつけても発火するマッチも登場した (Scott 20)。

マッチに関連する手回り品も様々につくられ、喫煙者の目を楽しませるものが多い。家庭用につくられたマッチ入れは郵便ポストの形を模したものやシダの葉の模様を施したものが人気で、どちらも机の上に置くのに便利な柱状であった (Scott 20)。陶製の卓上用マッチ入れも人気が高く、そのほとんどがドイツからの輸入品であった。子どもをモチーフにした愛らしい作品が多かったようである (Scott 20)。Samuel Jones の“Prometheans”という特製マッチ入れは黒と金の金属製で、ちょうつがいの蓋がついていた。Walker が初めて販売した摩擦マッチには円柱状の灰色の金属製マッチ入れも付属していた。シガーチップとシガーキャップはラベルのついた箱に入れて販売されており、当時の装飾趣味を反映するようなデザインと素材で作られていた (Scott 20)。携帯用のマッチ入れは時計のチェーンにつけられるようになっており、約 3 センチ程度の長さで非常に薄いシルバー製の洗練されたものもあった。デザインも列車のチケットの形をあしらったものから、バイオリン、ピアノを弾く猫など多様性に富み、所有者の遊び心をくすぐる (Scott 20)。

1844 年にクリミア戦争に参戦した兵士がシガレットをイギリスに持ち帰ると、パイプ文化が一気に消えたとすら言われているほど、瞬く間に世を席卷した。独特な香りがするものや、色つき、マウスピース付、木のプラグがついたものなども売られていた (Scott 30)。先述の Fribourg & Treyer の記録ではシガレットが最初にこの店で販売されたのは 1852 年になる。1845 年まではスナッフがまだ店の売り上げの大半を占めていたものの、50 年代になってシガーとたばこ (パイプ用) が同等の売り上げになり、1859 年にはスナッフの販売量が下降し、自然とスナッフを専門としたこの老舗の利用客も減少した (Evans 39)。

シガレットも他のたばこと同様に様々な独自の文化を生み出した。1895 年には初のシガレットカードが登場した (Scott 32)。シガレットホルダーは、大概是シガレットと一緒に売られていたが、海泡石などこだわりのある作りもあった。20 世紀初頭になると多種多様なシガレットケースが生産されるようになる。先のスナッフボックスのように、個人の特注であったり、大切な人への贈り物であったりと、それぞれのケースに特別な思いが込められていることが多かった。このことを示すエピソードに 19 世紀末生まれのイギリスの政治家 Winston Churchill (1874-1965) の体験がある。彼は 19 歳のときに母親から美しいシガレットホルダーを贈られた。これが Churchill の初のたばこコレクションとなった。愛煙家として名高い Churchill は、自身の息子にもカルティエの金のシガレットケースを贈っている (図 4)。Ellen Moers (1960) が、そのダンディ論のなかで「ダンディとは、趣味という儀式でもって自身を完璧に仕立てることにすべてを捧げる男性のことである」



図 4

(12-13)と論じているように、彼らは中身以上にそれを覆う外面的なもの、スタイルを殊更に重視した。Churchill 特注の、封筒の表書きをモチーフにした金のスリムなシガレットケースは手紙という形で愛する人に贈られたもので、一切の無駄をそぎ落とした上品でシンプルなアクセサリとしても機能している。このように持ち主の個性と心と趣味が結合し、一つの美に落とし込まれている

点で、シガレットケースは 18 世紀のスナッフボックスを彷彿とさせる。

本研究のテーマとなるダンディのたばこ文化は、彼らの精神性と思想を考察するうえで非常に重要である。反大衆化のメッセージや大量生産へのアンチテーゼ、個性の重視などを、政治的な活動ではなく、美術や芸術のかたちで表明したダンディにとって、たばこの嗜み方の作法とたばこの手回り品によって美意識を表現することはごく自然な行為であったとすら考えられる。高品質の嗜好品と贅を尽くした手回り品が彼らの経済力によるものであったとしても、後述するように、その遺産はのちに社会にとって重要な文化遺産として残されていくことになった。

4-2. ダンディズム研究の再検討

オックスフォード英語辞典 (OED) によればダンディ (dandy) の初出を確定することは難しいが 1813~19 年頃に頻出するようになったようで、「凝り性の洒落もの(exquisite)」で「独身貴族 (swell)」のことを指した。山田勝はダンディを既存の階級に属さない貴族(的な)新しい社会集団ととらえ、「ダンディー発生の際は、当然のことながら貴族階級出身の者が多かったが、後半になるとブルジョワや無産の芸術家やジャーナリストも数多く参入する。言うまでもないことだが、ダンディーとは一つの社会階級に属するものではなく、独自の貴族趣味と風変りな文明批判の世界に生きる人々のことである」と定義する (1989: 21)。山田はダンディズムを二期に分け、George IV 時代に貴族・上流階級を中心に形成された初期のダンディズムと、フランスからの再輸入の形で再流行した 19 世紀末のダンディズムとの違いを強調している。19 世紀末のダンディたちの中にはブルジョワ中流階級出身者がほとんどであるため、初期ダンディズムとは異なることを強調しているが、本研究で注目したいのはむしろ、二つの時代のダンディズムにある共通点、すなわち既存の階級区別が崩壊し裕福なブルジョワ階級が貴族化する時代を象徴した点で、ダンディズムが憧れや批判の対象となったことである。

本研究では、20 世紀後半から 21 世紀にかけての最近のダンディ研究をダンディズム第三期と考える。第一期は従来定義されている通り、Brummell の生きた時代の 19 世紀初頭、主にイギリスで書かれたもので、彼を直接知る者による逸話、彼の影響力に対する賛美（William Jesse, 1809-1871）・模倣（Edward Bulwer-Lytton, 1803-1873）・批判（Thackeray や Thomas Carlyle, 1795-1881）で成り立つ。第二期は、19 世紀末から 20 世紀初頭に、第一期に流布した Brummell の伝記や逸話をもとに、彼を神格化したダンディ論形成と、その実践で成り立つ。Barbey d'Aureville（1808-89）や Charles-Pierre Baudelaire（1821-1867）などのフランスの文人によって始められ、イギリスでは Wilde や Beerbohm などがダンディズム再流行の一翼を担った。第三期、20 世紀後半から 21 世紀初頭の今日に至るまでは、19 世紀のダンディズムを再考し、時代を超えて人を魅了し続けるその意味を探ろうとする批評から成り立つ。この第三期は主に、第二期のフランス人によるダンディズム論に依拠し、ダンディズムを現代文明やブルジョワ消費社会に対する高潔な反抗精神、独立自尊の精神としてその意義と現代性を称えるものが多い（ロジェ・ケンプ、生田耕作、中野香織など）。本研究では、これまでの研究とは一線を画す Rhonda K. Garelick（1998）によって提唱されたダンディズムの「劇場性」にも注目し、ダンディズムにおける小道具としてのたばこの使われ方とその礼儀作法の観点から考察した。

4-2-1. 第一期ダンディズム：賞賛と批判

第一期のダンディズムでは、Brummell のファッション・センスを称賛、模倣するものと、ダンディズムを浅薄と批判するものとの対立が見られる。Jesse は、Brummell に直接取材をして伝記を書き、後のダンディズム論形成に影響を与えた。Brummell の後継者として社交界の寵児となった Bulwer-Lytton は *Pelham*（1828）などのダンディを主人公とする社交界小説を発表した。Bulwer-Lytton 自身、Brummell 同様、自らのダンディズムで貴族階級にまで登りつめた一種の成り上がりであり、彼の作品は「疑似貴族になりたいと望んでいる、貴族よりも下の階級の人々」をダンディ＝ジェントルマンに変える教則本として機能した（中野 72）。たばこを使った所作も礼儀作法の一つとして、*Pelham* の第 49 章に登場している。男同士の交友成立の一儀礼として、スナッフボックスを差し出し、それを相手が共有することで関係が成立する様子が描かれている。フランス宮廷ではスナッフの嗜み方に関する厳しい規則があり、イギリスの社交界においても礼儀作法の一つとして踏襲されたが、「どんなスナッフボックスを所有しているかでその紳士のことが分かる」とされるほど、たばこという小道具の種類やその扱い方が社交界での自分の立場を左右していたことが分かる（Brooks 163）。

当時、うわべだけの似非貴族（ダンディ）とそれをもてはやすブルジョワ階級の俗物根性を批判したのが Thackeray や Carlyle である。Thackeray も主たる編集者として名前

を連ねる *Fraser's Magazine* には、*Pelham* の書評を装いながら、Bulwer-Lytton のダンディズムを「洋服屋で作られるジェントルマン」と呼び、本物 (natural) のジェントルマンと偽物のダンディを区別するよう訴える記事が掲載されている (Culpepper 516)。

ダンディとジェントルマンについての区別は、*Cornhill Magazine* (1860) で、Thackeray による George 王朝四人の国王に関する記事 “The Four Georges” (1860) の中でも繰り返されている。Thackeray は、George IV がいかに「ヨーロッパ初のジェントルマン」という名声に相応しくないかを列挙する。「ベストのボタンの話」以上の深みのある知的な会話もできず、不誠実で意地が悪い人物だと嘲り、知性も道徳観念もないこの国王を本物のジェントルマンとよべようか、と散々にこき下ろしている (Thackeray 2009: 787-788) (この記事に対して後に Beerbohm が George IV のダンディズムを再評価する形で反論した)。また Thackeray はその代表作 *Vanity Fair* (1847) でも、裕福な中流階級の貴族趣味を俗物根性と呼んで痛烈な批判をしているが、ダンディという成り上がり者が貴族階級に入り込むことで、既存の階級間の差異が消滅していったことへの危機感の表明でもあった。

Thackeray がブルジョワの疑似貴族ぶりを皮肉る中には、喫煙に対する厳しい礼儀作法と道徳観も含まれていた。例えば、*Fraser's Magazine* (1841-42) に連載された *The Fitz-Boodle Papers* は、社交界やクラブに出入りし、ギャンブルとシガーの好きな自称「ジェントルマン」による自身の恋愛・結婚・交友の手記の形をとっている。中でも特徴的なのは、主人公が人生最大の問題だと繰り返し不満を述べる、嫌煙化する社会、特に中・上流階級の女性の嫌煙ムードである。喫煙は犯罪・悪徳として断罪されている社会でたばこを吸うことは殉教者として身を滅ぼす覚悟を持つことと嘆き、男が結婚するためには、女性かシガーかどちらか一方を選ぶことだ、と喫煙を巡る否定的な道徳規律を風刺している。

Carlyle も *Fraser's Magazine* (1833-1834) で、*Pelham* をお手本にしたダンディズムの流行を風刺した。後に *Sartor Resartus* としてまとめられるが、その中の第 10 章「ダンディ的の身体」において、ダンディは服を着るためだけに生きる男だとその軽薄さを批判し、当時ダンディの集うクラブ Almack's を自己崇拜という悪魔崇拝の教会だと警告している。ここでも、ダンディの信奉する衣装や礼儀作法という見せ掛けだけのものは一時的なもので、普遍的な真理はそれとは別のところにあると、ブルジョワの(偽)貴族化を批判している。*On Heroes* (1841) においてこの区別は、軽薄なダンディに対する英雄という人物像を論じることでも繰り返された。

ダンディの衣装へのこだわりには批判的だった Carlyle だが、パイプ愛好家としても知られていた。当時のたばこ製造・販売会社 Cope は、喫煙者向けの読み物として全 14 巻の

小冊子を出版している。たばこに関する詩や文学からの抜粋、たばこの歴史、たばこにゆかりのある人物（Walter Raleigh, c.1554-1618 など）を特集しているが、その第 5 巻は Carlyle 特集である。主な内容はたばことは関連のない伝記や著書の紹介などだが、パイプやたばこに関して彼が書いたことの抜粋も載せている。例えば、Fredrick I (在 1688-1701) の「たばこ会議」について、議会につきものの無駄な饒舌がパイプによって排除されたもっとも簡素で効率の良い議会だったと称えている（*Cope's Smoke Room Booklets Vol. 5: 56-57*）。また、本研究のスモーキング・ルームの項でも述べるように、たばこは男同士の社交的な付き合いの空間に必要な小道具として機能していることも述べている。

Carlyle も、Thackeray 同様に（喫煙愛好家でもあったが）、ダンディという成り上がりの偽貴族の集団に対しては批判的であったが、彼のダンディ批判は、皮肉にもダンディズムの真髓をついたものとして 19 世紀末にダンディズム論（第二期）を構築した英仏のダンディ芸術家によって利用された（Feldman や Moers という第三期の批評家も Carlyle の英雄論をダンディ論として論じている）。

4-2-2. 第二期ダンディズム論：文明・大衆社会に対する反逆精神と退廃性、その象徴としてのたばこ

Jesse のブランメル伝でも Brummell をダンディとは呼ばなかったように、ダンディという言葉が流布されるにつれて、庶民が外見だけを真似た似非貴族という悪いイメージも広まり、イギリスでは徐々にその流行はすたれていった。ところが 19 世紀末になって、フランスで Barbey や Baudelaire という作家によって Brummell とダンディという語が理想的な男性像を指すものとして再評価されると、イギリスにも再輸入される形で蘇った（第二期ダンディズム）。Carlyle の批判も、衣装や外見という無為なものに命を懸ける、世俗の価値観や道徳観を超越した人物像として、ダンディの精神性と魅力を強調するために（おそらく Carlyle の意図に反して）再利用された。例えば、Barbey は「Brummell は外見の優雅さで名声を得た」と、ブルジョワ階級のように富によってでも、貴族のように血統によってでもなく、趣味の良さという空虚なものを追及するという生き方によって支配的地位を獲得したと、その禁欲主義と自制心を称えている（Barbey 24）。Baudelaire も Barbey の論旨を受け継ぎながらも、ダンディズムの定義に詩的情感を加え（ダンディズムを落日と例えるなど）、倦怠感と無為の美学という世紀末的退廃趣味をダンディズムに結合させた。

Baudelaire と同時代の詩人 Théodore de Banville (1823-1891) のいう「シガレット・ダンディ」(毎日 60 本ものたばこを巻き、吸うことに人生を費やす貴族的な男性像) に触発されて、独自のたばこ論を唱えた Richard Klein (1993) によれば、男性名詞シガーの後に *ette* という女性形を作る接尾語をつけた「シガレット」という語がフランス語で書き記されたのは Baudelaire の作品が最初のものである (Klein 8)。Baudelaire はシガレットを、男を破滅させるような危険な娼婦に例えているが、これはシガーが、女という性と家庭生活に対立する男性的なものを象徴していたことと対照的である。David Grylls (2006) はこの変化に注目して、特権的な力強い男性性を象徴するシガーに対して、それよりも食味が格段に弱いシガレットは女性の繊細な身体とその誘惑、危険を象徴する物へと変わったと指摘する。例えば、Thackeray の *Vanity Fair* には、女が男を受け入れるしぐさとしてシガーに火をつけるという描写 (第 25 章) があり、夫への愛情の喪失は以前好ましいものであったシガーへの嫌悪感として表現 (第 44 章) されている。これに対してシガレットは、Ouida の *Under Two Flags* (1867) の「シガレット」というヒロインに代表されるように女の身体を象徴する。さらに、Wilde の *The Picture of Dorian Gray* (1891) には、Henry 卿がシガーを吸う Basil に対して、シガレットを勧めながら、「シガレットは満足の底をつくことがないという意味で、完全な、絶妙な快感をもたらす」と説いて、シガレットを性化している (Wilde 67)。さらに、Henry 卿が好んで吸っているのはアヘンを浸み込ませたシガレットであることから、この快樂には背徳的な意味も暗示されていることが分かる。Susan Zieger (2009) もたばことダンディの関連について、その非正統的な性的な暗示に注目する。特に、喫煙がイギリスの軍人と愛国主義を象徴しているという Matthew Hilton (2000) の見解に対して、*Under Two Flags* の「シガレット」という名の少年のような短髪の女性兵士と、絶え間なくシガレットを吸い続けるダンディ Bertie との男同士の同性愛を模したような、非因習的な男女関係描写の分析を通して、ダンディの両性具有的表象とシガレットの持つ性的に曖昧な含意を関連づけている。このように、世紀末のダンディズムには、既存の社会に対する反逆的で、退廃的な趣味が付与されたが、たばこに関しても同様に性化され、逸脱を象徴するものとして利用された。

20 世紀後半から (日本をはじめ) ダンディ論が再燃する。主に Barbey や Baudelaire に代表されるフランスのダンディズムを再考し、文明社会への反抗精神としてその独自性を称えるものが多い。例えば、ダンディズムを「画一化の世紀における差異の崇拜」(ケンプ 16) として、規律と勤勉という近代の大衆社会がよしとする道徳的規律を、衣服や身に

つけるものや動作という実のない、うわべだけのものへの極端な自己規制と禁欲主義を讃えるものと理解された。生田耕作（1975）も、主に Barbey の熱狂的なダンディズム論を受け継ぐ形で、理想の男性像としてのダンディを日本に紹介した。21世紀に入っても、高潔で独特な精神性や主義をもち、現代社会の常識や道徳律に挑戦する人物としてのダンディ像は繰り返されており、例えば、中野香織（2009）はダンディを「空気読まない」男（21）として、20、21世紀の歴史上の傑物のダンディズムとその魅力を語っている。たばこの関わりからダンディに関する先行研究を再検討すると、上述のような、社会の常識や倫理観に反逆する象徴としてのたばこの意味も見えてくるが、Garelick による「劇場性」に注目したダンディ研究も、本研究に新しい視点を提供することが分かった。

4-2-3. 第三期ダンディズム論：「劇場」としてのダンディズムとたばこ

Garelickは、19世紀のダンディズムの流行を、20、21世紀のテレビ、舞台、映画におけるスター性のはしりだと唱える。それは、「公」的に見せている姿（偽物）が「私」的な実生活（本物）であるという錯覚を作り出す意味での劇場性を指す。欠点もあれば平凡なところもある生身の人間を、現実離れした一種の芸術作品に仕立て上げて、役者が舞台上で演じる時のように、個人の「私」よりも「公」として作った人格を本物らしく見せつけることでカリスマ性を増大させていく演劇的技術がダンディズムだ、とGarelickは述べる。実際、19世紀末のダンディズム再流行を担ったBarbeyは「ダンディは自らを美しい彫像にする」と、ダンディの非人間性を強調している（Barbey 23）。Brummellの一個人としての弱さと醜さ（借金苦でフランスに亡命後、梅毒による精神錯乱のはて孤独死したという事実）を意図的に排除し、Brummellを英雄的・超人的なダンディという偶像として再創造したことが指摘されている。

劇場性という、「公」と「私」の境界の曖昧さと、その真実性と虚偽性の可逆性という視点からダンディズムを再検討すると、これまであまり指摘されてこなかった、Wilde や Beerbohm というイギリスのダンディたちの特異性が見えてくる。彼らは、フランス流の「廃類趣味」や「不道徳」「反逆」というポーズを受容し真似をしながらも、同時に、その劇場性についても自ら言明しているからだ。見かけは嘘、という常識に対して見かけだけが全て、見たままが本当だ、という劇場性の幻想を強調するのが彼らのダンディズムであり、その表現にはたばこが伴われている。

Times の 1830 年 1 月 7 日付匿名記事が Brummell を舞台俳優（actor）と呼び、衣装から話し方に至るまで念入りに計算された彼の作法を皮肉たっぷりに懐古しているように、ダンディズムとはどうみせるかを念入りに計算した演劇的技巧と言える。阿片吸引、殺人、

同性愛的暗示を含んだ扇情的な小説 *The Picture of Dorian Gray* (1890-1) の作者として Wilde も、「金の吸い口の付いた高価なシガレットをおびたたく吸い捨てていた」という逸話が残るほど、ダンディとしての人生を演出した (山田 1989: 96)。勤勉、儉約をよしとするブルジョワ的道德観に挑戦するかのよう、無為と浪費を好むダンディズムのポーズを誇示し、ついには当時犯罪とみなされた男色の罪で投獄された Wilde は、公私にわたり反逆的、退廃的なダンディと見なされていた。その彼が好んで吸っていたのはシガレットである。Wilde の弟弟子として親交のあった Beerbohm による Wilde の絵には、シガレットを手に気取った様子のワイルドが描かれている (図 5)。投獄される原因となった年下の同性の恋人、Alfred Douglas 卿と談笑する絵にもシガレットの煙が立ち上っている (図 6)。これを描いた Beerbohm は 前述のように、George IV のダンディズムを再評価し、“Dandies and Dandies” (1896) も記した 19 世紀末ダンディズムの最後を飾る人物である。V&A 美術館には、彼のトップハット (図 7) や黒いスーツと杖等が展示・保存されており、その着こなしの洗練されていることは当時から有名であった。自らの自画像においてもそのダンディズムは表現されており、長い吸い口を付けたシガレットを吸った姿も描き残している (図 8)。また、*The Happy Hypocrite* (1897) では、Dorian Gray パロディである退廃的な主人公のダンディを紹介する中で、非喫煙者であることを「褒められない美德」と皮肉を込めて書いており、ダンディにとってたばこは不可欠な小道具の一つと考えていたことが確認できる。



図 5



図 6



図 7



図 8

Beerbohm は、フランスのダンディズム論によって深遠で謎めいた精神性の表象とされたものを、Brummell に回帰する形で、衣装の簡素な優美さという外見の技巧的な側面のみ還元した。Beerbohm の得意とした風刺画も彼のダンディズムの表現方法のひとつであった。風刺画は「ただ象徴だけで成り立ち、物語を述べたり、道徳的判断を下したりはしない、対象の持つ外見をそのまま描く」と述べているように、見たままの表層を真実に見せようとするダンディズムの解釈とも通じている (Beerbohm 1997: 15-16)。こうした主張は、*The Happy Hypocrite* でも繰り返されている。主人公の George Hell 卿は、Brummell と同時代の人物設定で、摂政皇太子 (後の George IV) の Carlton House に入り浸る、ギャンブル好きの退廃的なダンディ貴族である。*The Picture of Dorian Gray* では、その悪徳が刻み込まれて醜くなるのは主人公の肖像の顔の方だが、こちらはより現実的に、主人公の悪徳に満ちた生活を反映するのは彼自身の醜悪な顔である。恋をした少女に聖人の顔をしている人としか結婚はしないとわれ、聖人顔の精巧な仮面を作らせ、それをかぶることでその少女と結婚する。その後、昔関係のあった娼婦が現れ、その仮面をはぎ取るが、その下から現れた「本当の」顔の方も仮面と同じ聖人の顔をしていた、という物語である。外見の背後に深遠な真実は隠されていない、見たままが真実という演劇的なダンディズムが小説という形で表現されている例である。

「見かけが本当」という考え方は Wilde のダンディズムにおいても同様であり、それは世間が持つ自身のイメージに対する Wilde の返答からも分かる。Arthur Sullivan (1842-1900) と W. S. Gilbert (1836-1911) によるオペラ *Patience* (1881) の一場面では「ピカデリー通りをポピーだか百合だかを持って気取って歩いていた」と Wilde のダンディズムが風刺の対象となっていた。しかし、これに対して Wilde は、「そんなことは実際にやろうと思えば誰でもやれる。僕がそういうことをしたと人に信じさせることの方がずっと難しい」と返答したことが知られている (Gilman 121)。世間を騒がす公のペルソナが自身の実生活、本質と同一だという幻想を世間に持たせようというダンディ的演劇性が表明されている一例と言える。

彼の作品にも同様の演劇性がたばこという小道具を使って表現されている。*The Importance of Being Ernest* (1899) という芝居の脚本では、冒頭に出てくるシガレットケースの謎が物語の嘘と真実を象徴する役割を果たす。Ernest という名で知られる主人公が友人 Algernon のスモーキング・ルームに「Cecily から Jack おじさんへ」と刻印の入ったシガレットケースを忘れる。これが自分 (Ernest) の所有物だと誰もが知っているという

ことで納得しない Algernon に、実は Ernest というのは都会でダンディとして生活する時に使っている偽名で John (Jack はその略称) が本名だ、と打ち明けることから物語が始まる。先に (4-1 と 4-2-1)、19 世紀初頭、スナッフボックスはその持ち主の個性と本質を象徴する物として認識されていたことを指摘したが、ここでのシガレットケースは、それを所持する Ernest という名の架空のダンディ(偽物)とそれを演じる John という貴族(本物)の立場の逆転が起こることを暗示している。後に、Algernon も Ernest というダンディの振りをし、そのお芝居によって John と Algernon ともかねてから望んでいた女性とそれぞれ結婚できた、という恋愛喜劇で幕を下ろす。つまり、Ernest という架空の人物が本物になることで幸福を得る、という真偽の逆転劇を象徴するのがシガレットケースという小道具である。

同様の真偽の価値の逆転は、*Lady Windermere's Fan* (1893) という脚本によっても表現されている。ここでの小道具は扇であるが、実の母親であることを名乗らない(嘘を通しつく)ことによって、娘に対して母親としての本当の愛情を示すことが出来た女の話になっている。

The Picture of Dorian Gray では、Dorian の肖像(嘘)が、Henry 卿の愛煙するアヘン付きのシガレットの煙の渦の中から幻のように登場するように、たばこの小道具としての役割は重要である。Phyllis Weliver (2010) は、Wilde のダンディズムとたばこ、音楽への関心に注目して、Matthew Arnold (1822-1888) の言う *disinterested* (公平無私・無関心) な思索の態度が、Wilde の表現するたばこを吸いながらいい加減にピアノを弾くダンディのポーズにも示されていると論じている。つまり、内容よりも「形式」を重視するという音楽的な感性とエリート主義的な、贅沢な思索の態度を表現するためにたばこが利用されていることが指摘されている。さらに、Wilde が *Critic as Artist* (1891) の中で「至高なる (divine) 一時的な快樂」としてのたばこへの言及をしていることについて、当時アヘンによって誘引される幻想的な夢うつつの状態を「至高な」と呼んでいたことから、たばこの喫煙と阿片吸引は 19 世紀末には同義的であったことも指摘している。実際、Wilde は、(ちょうど Henry 卿のように) アヘンを浸したエジプト産(当時の最高級品)のシガレットを絶え間なく吸っていたことも記録されている (Weliver 334)。Dorian の墮落や殺人を映し出す肖像が本物の実体となっているという、虚像と実像の逆転は、Dorian が最後に肖像を刺し殺すことで自らを殺害することにも象徴されている。

4-3. スモーキング・ルーム：男性限定の空間形成にみられる劇場性

一般的に嗜好品と称されるものの中でも、たばこは独特の時空間——芸術を生み出す創造と想像の時間、政治と社交の潤滑油としての「間」、瞑想にひたる私的空間——を作り出したと考えられる。また、そのような空間を享受することはとりもなおさず支配・有閑階級の男らしさの表明ともなった。喫煙のために特別に設けられたスモーキング・ルーム（上流階級の邸宅であるマナーハウスのスモーキング・ルームとロンドンのジェントルマンズ・クラブのスモーキング・ルーム）が 19 世紀の産物であり、それは特権階級のジェントルマンが意識的に顕示する「品位あふれる閑暇」（ヴェブレン 111）を確保するのに最適な場であった。同時に、煩雑で世俗的な日常生活からの逃避を可能にするスモーキング・ルーム内の装飾は彼らの時間と財の浪費を表しており、そこに反大衆化のメッセージや大量生産・効率化へのアンチテーゼ、没個性化する社会への批判精神などを読み取ることが出来る。

4-3-1. マナーハウスのスモーキング・ルームの登場

先述のように、18 世紀末頃からたばこ（特にパイプ）は上品で精錬された社交界からは姿を消したために、上流階級の住まいである郊外のマナーハウス内でも嫌煙されるようになった。客人が喫煙を希望した場合、使用人の部屋か屋外でしか許されず、しかも二度と招待されないという憂き目に会うことも多かったようである。

だが、こうした喫煙者への厳しい対応は 19 世紀になると様々な理由により緩和され、マナーハウスにはスモーキング・ルームが作られるようになった。そのひとつの要因にはこの時代の上流階級に生まれた独身男性の経済的な事情が挙げられる。ヴィクトリア朝の大家族では爵位や館の継承者は嫡男であるため、次男以下は年間数百ポンドを譲り受けて生計を立てることを求められ、軍人、官僚、牧師などジェントルマンに適した職業に従事しながらその補填に充てた。だが、この程度の経済力では上流階級の令嬢を妻に迎えられなかったために、独身で過ごすものが多かった。このような独身のジェントルマンに提供された安息の場が、郊外ではマナーハウスのスモーキング・ルームであり、ロンドンではジェントルマンズ・クラブであり、どちらも彼らにとっての「感情のはけ口（safety-valve）」（Girouard 1978:295）の場となった。彼らは女性たちが関心を向けない類の話題について語り合いながら、蒸留酒やシガーも楽しんだ。この際に酒とたばこを断ることは、ジェントルマンとして「行儀が悪い（bad form）」と見下された（Girouard

1978:296)。鉄道の発展により、首都ロンドンと郊外の往復がより自由に気軽にできるようになったため、独身貴族は週末や休暇には狩猟とスポーツを楽しむために郊外の実家に戻り、大勢の親戚や友人たちと過ごすようになったようである。

男性限定の閑暇の場としてのスモーキング・ルームは、あたかも普段の生活からの逃避の場として設けられたかのように、その異次元の空間に様々な趣向が凝らされていた。そのひとつに、衣装替えがある。晩餐の後、女性たちが寝室に戻ると、男性たちはスモーキング・ジャケットとスモーキング・キャップ



図 9

(図 9) を着用してスモーキング・ルームに入った。V&A 美術館にも当時のジャケットと帽子が収蔵されているが、その帽子は図 9 と同じ形で、色鮮やかな花模様の刺繍がほどこされている。美術館の説明によれば、似たような帽子は 1850 年代に流行し、柔らかなフェルトやプラッシュのような素材で作られ、当時の東洋趣味を反映した異国情緒溢れる模様が好まれた。ジャケットはくつろぎやすいようにシルク、ビロード、毛のような柔らかな素材で作られ、色は深紅、緑、青、茶や黒をベースにしたものが多かったようである。部屋を出る際に衣服にたばこの臭いが染みつかないように喫煙者は敢えて着替えていたようだが (Apperson 119)、ジャケットと帽子に反映された上品なデザインは機能的な目的を越え、着用者の洗練された立ち居振る舞いと意識的な努力を示唆している。つまり、ダンディの精緻を極めた衣装へのこだわりと、一日に頻回の衣装替えには、たばこの香りを他所に持ち込まないという実用的な側面と美的センスの誇示の両方の目的があったことが分かる。

スモーキング・ルームの内部も、それぞれの個性と美的鑑識力が結集されたものとなっていた。その最たる例が、ウェールズの Cardiff Castle(1868-71)の時計塔内につくられた壮麗な 2つのスモーキング・ルームである⁴。19 世紀後半にカーディフ城の修復に着手した第 3 代城主の Lord Bute (1847-1900)は、当時のイギリスでは革新的なゴシック建築家として著名だった William Burgess (1827-81) に依頼して、地上 150 フィートの時計塔を建設した。その頃独身であった城主のためにつくられた塔は「独身貴族向けの特別室」として寝室、浴室、夏・冬用のスモーキング・ルームから成り、冬用のスモーキング・ルームは 2 階に、夏用は最上階に設置された。Lord Bute と Burgess はこの修復工事にあたり特別な情熱を共有していた。彼らはともに好古家で過去への憧憬に心があふれており、俗悪な産業社会の景観からゴシックの時代への逃避を求めている。Burgess は当時勃興した唯美主義の中心的存在である Dante Gabriel Rossetti (1828-82) や Algernon Charles

⁴ 塔の最上階に設けられたスモーキング・ルームとビリヤード・ルームと結合したスモーキング・ルームの具体的な例は Girouard (1973) に詳しい。

Swinburne(1837-1909)といった芸術家たちと親交があり、その美意識はWildeをはじめとする当時のダンディ芸術家と通じていた。BurgessとLord Buteは莫大な費用を投じて、色彩あでやかで趣向が凝らされた中世世界を再現した。建物の外観はおろか室内までもが様々な彫像や壁画で埋め尽くされ、天井には豪華絢爛なシャンデリアが煌めき、黒檀や象牙でつくられた伝説上の怪獣や動物たちが所せましと並び、色とりどりの床のタイルは世界地図の模様を成していた。夏用のスモークキング・ルーム(図10)は19世紀につくられたスモークキング・ルームのなかで「もっとも奇抜で、比類なきすばらしさ(the strangest and most wonderful)」を誇っていたといわれている(Girouard 1973:125-130)。その部屋のバルコニーからは、ブリストル海峡、サマーセット湾、南ウェールズの青い山々が一望でき、夏の夜風にあたり、紫煙をくゆらせながら、美しく壮大な景色が楽しめるように配慮されていた。



図 10

一般的なマナーハウスでは、スモークキング・ルームはビリヤード・ルームと結合していることが多かった。マナーハウス Brodsworth のビリヤード・ルームは当時の代表的な例である。部屋の壁は馬と狩猟の絵で占められ、快適な革張りのソファは戸外の狩猟の様子を楽しめるように備え付けられていた。Breadsall Priory という名のマナーハウスではビリヤード・ルームが当時の東洋趣味に沿ったムーア式の装飾で統一され、Cragside は派手なジャコビアン様式、Wortley Hall はルネサンス式が導入されていた(Girouard 1973: 26)。このようにスモークキング・ルームは男性限定の空間として所有者の美意識と経済力を誇示する場所でもあり、有閑貴族としてのライフスタイルを送るために不可欠な空間であった。

スモークキング・ルームは男性ならではの英雄的行為と密接に関連していたので、先に述べたようにスモークキング・ルームがビリヤード・ルームと隣接・結合していたり、銃を保管・陳列するガン・ルームと結合することもあった。また、男だけの憩いの場は女性の生活の場と通常対極に置かれ、このような設計上の工夫は家庭での精神的なバランスを保つ目的も兼ねていたと読み取れる。またマナーハウス Bryanston のように、館の主人である男性が時間を経るにつれてより神聖な空間に隠遁できるような設計——応接室から書斎へ、そこからビリヤード・ルームへ、最後に化粧室とスモークキング・ルームから寝室へと、ライフスタイルの時間軸に沿って部屋が続く——も考案された(Girouard 1973: 26)。

19世紀のマナーハウスでスモークキング・ルームがつくられるようになった背景には、王族の影響もあった。スナッフをこよなく愛した George IV の弟 Duke of Sussex

(1773-1843)は、兄とは異なりシガーやパイプの熱心なコレクターで、彼が招待された晩餐後では、食事の後に女性は退席し、卓上にたばこが饗されたと言われている。この習慣はやがて姪の Queen Victoria (在 1819-1901) の夫の Prince Albert (Prince Consort of England, 1819-1861)とその息子 Edward VII (在 1901-10) の時代にさらに固められた (Girouard 1978: 294)。Prince Albert は 1845 年に王室の避暑地のワイト島に建てられた Osborne House にスモーキング・ルームを設けたが、そのドアには夫妻の頭文字となる“V&A”ではなくアルバート公の“A”だけが敢えて施された。ドアの向こうの空間が男性限定であることを仄めかすエピソードである。後述するように、Edward VII はジェントルマンズ・クラブのスモーキング・ルームの設立にも深く関与しており、王侯の喫煙の作法とそれに関わる生活様式が、社会階級で一段下に隣接し交流もあった貴族・上流階級の暮らしにも影響を与えたことは想像に難くない。

4-3-2. ロンドンのクラブにおけるスモーキング・ルームの登場

独身貴族をはじめとするジェントルマンのロンドンの安息の場はジェントルマンズ・クラブであり、そこでスモーキング・ルームがみられるようになったのも 19 世紀である。この時代に中上流・上流階級の男性に愛読された雑誌のひとつ *Graphic* (1896 年 11 月 21 日号) には、1819 年に設立された老舗の Travellers Club で喫煙をめぐる論争と革命が起きたことを以下のように報道している。

50 年前だったら大半の男性はスナッフを嗜み、喫煙者は少なかった。いまやスナッフを嗜むものは殆ど見かけない。それにもかかわらず、スナッフ時代からの喫煙に対する偏見はいまだ根強いようである。ロンドンの由緒あるこのクラブでは、その偏見が他より長く続いていたが、先週、新たな喫煙史が幕を開けた。シガレットを喫煙するために最上階までへとへとになりながら登らざるを得なかった従来 of 慣例について、「より近代的な精神をもつ」会員から異議が申し立てられ、会合が設けられた。そしてついに新しい会則が作られ、一階の一角での喫煙が可能となったのである。この結論については今でも会員内で温度差があるものの……この妥協案を喜ぶ会員は合理的な結論が出たと支持している。

その名が示すように、海外赴任の経験者、外交官や各国の VIP、さらにはスパイなどの海外経験者で構成された Travellers Club (Lejeune 205) が設立からおおよそ 80 年の歳月を経て改革に臨んだ経緯をみると、19 世紀後半から登場したシガーとシガレットの影響力の大きさが推察できる。シガーとシガレットの受容をめぐる喧争は、そのほかの有名なクラブでも起きていた。George IV と Brummell の時代に一躍有名になったイギリス最古のク

ラブ White's は、19 世紀中葉に Queen Victoria の息子 Prince of Wales (後の Edward VII) の入会希望を、同皇太子がヘビー・スモーカーであったことを理由に取り下げた。入会を断られた皇太子は、腹いせに Marlborough Club の新設を支援し (Apperson 138、Lejeune 226)、新たに設立されたこのクラブではダイニング・ルームをのぞく全ての場所で喫煙が許された。イギリスを代表する卓抜な学者や知識人、法曹界と教会関係者が名を連ね、50 人以上のノーベル賞受賞者が会員である Athenæum Club は 1900 年になって地下にスモッキング・ルーム／ビリヤード・ルームをつくった。蔵書数が 9 万冊以上とクラブ界隈最多であることを鑑みれば (Lejeune 25)、会員が火災を恐れて喫煙に消極的だったとも推測される。ちなみに「芸術、文学、科学に対するリベラルな支援をいとわない貴族」 (Lejeune 32) で構成され、学術世界への貢献においては屈指の同クラブでは、その設立理念を象徴するかのように教養と高い美意識を誇る George IV の大きな肖像画が掲げられている。19 世紀のイギリス社会では負の遺産を残した不名誉な王という評価が強かったダンディ王の肖像画が、最高峰の学識に富む会員のみが厳選される Athenæum Club で掲げられているのは象徴的である。“London Society” と題された銅版画 (図 11) は当時のロンドンのクラブのなかでも政治的なクラブとして有名な Carlton Club (1832 年設立) の光景である。

小説家でダンディとして知られた Benjamin Disraeli (1804-81) がイギリスの首相の座を得たのも同クラブの入会なくしてはあり得なかったといわれているほど、このクラブでの人脈と政治力は緊密につながっていた (Lejeune 73)。



図 11

Athenæum Club ではスモッキング・ルームが地下に置かれたが、衛生と安全管理のために屋上にスモッキング・ルームを設けるクラブが多かった。まだ街灯も十分でないロンドンの闇夜にスモッキング・ルームから放たれる光は当時のイギリス人にとって幻想的ですらあり、スモッキング・ルームはあたかも空中に浮かぶ一種独特の異次元のように想像されていたようである (Apperson 123)。そしてこの時空間で、室内にいる会員は彼らの一職業としての閑暇を堪能していた (ちょうど Wilde の *The Importance of Being Ernest* に喫煙が独身男性の「職業」とあるように)。このことを如実に示すのが、中・上流階級男性の愛読誌のひとつ *Cornhill Magazine* (1862 年 10 月) に掲載された “The Smoking-room at

the Club”というエッセイである。そこにはシャーロック・ホームズを生んだ作家 Conan Doyle の父親である Richard Doyle による挿絵とともに、クラブのなかでシガレットとシガーをくゆらす男性たちの姿とその心情が描かれている。Doyle が描いたのは 1831 年に設立された Garrick Club の光景で、このクラブは当時一斉を風靡した俳優と文豪が主な会員となっており、愛煙家の Duke of Sussex がパトロンとなっていた (Lejeune 110)。リベラルでモダンな生活を美化する同クラブで喫煙も楽しまれていたことがわかる事例である。このエッセイによれば、スモーキング・ルームという特別な空間で会員たちがたばこを介して日々の生活から逃避し、憂さを晴らし、開放的な気分になっていること、そしてたばこが与える幸福感はどんな思索や会話にも匹敵しないことが主張されている (512)。喫煙のポーズも閑暇を極めるためには重要であり、ソファに深く腰掛け、足を台にのせて高くし、天井に向かって紫煙をくゆらせ、静かに立ち上り雲のように漂う煙をぼんやりと眺めている間に、生活の苦悩も消えていくとされている(512)。

ジェントルマンズ・クラブにはそれぞれ特徴と理念があり、それに即して会員が選出されていた。ロンドンのクラブの多くが 19 世紀に設立されたが、そこはジェントルマンにだけ許された特権的な空間であり、そのなかでたばこは大きな議論の的であると同時に彼らの社交の重要な潤滑油ともなり、さらには個々人が日常生活から逃れて銘々が独自の快楽を追求する媒介役も果たしていた。

4-4. ブルジョア階級がもつた「本物らしさ」——デパート、広告、雑誌、オークションとコレクションにみるダンディたばこ文化の影響力

ダンディズムのたばこ文化がブルジョア階級に与えた影響力を考察するために、報告者は 5 つの媒介——デパート、広告、雑誌記事、オークション、コレクション——に注目した。ダンディの貴族趣味がいかにしてブルジョア階級のライフスタイルに影響を与えたかを検証するには、今なお根深いイギリス人の階級意識を無視することはできない。フセヴォロド・オフチニコフのイギリス論にもあるように、社会的梯子を登りつめてくるブルジョア階級の人々が上流社会で受け入れられるには、上流社会の伝統と行動規範を受け入れるという条件が暗黙裡に含まれていた。ダンディ芸術家からは「無個性な大衆」として批判的に表現されたブルジョアだが、実際には彼らは自立と個性を重んじ、自助努力(self-help)の精神で刻苦精勤しながら富と地位を築いていた。有閑なジェントルマンとしての名声を獲得したとはいえ、貴族階級・上流階級が長い伝統のなかで培ってきた美意識に欠けてい

たブルジョア階級は、上流階級が享受していた自尊心と学術と芸術の知識、嗜好の自由を自らも手に入れたいという野心と上昇志向をもち、可能な手段でもって貴族的な生活や美意識を模倣することに努めたのである。Thorstein B. Vevelen の *The Theory of the Leisure Class* (1899) にあるように、階級文化の隔たりが崩れるにつれ、「上流階級によって課せられた名声の規範のもつ強制的な影響力は、ほとんど妨げられることなく社会秩序の最下層にまで及ぶことになる。その結果、おのおのの階層に属する人々は彼らよりも一段上の階層で流行しているために全精力を傾注するということが生じる。失敗したら面子と自尊心が傷つくという痛手を被ることになるから、少なくとも外見だけでも、社会的に承認された基準に従うほかはない」(高哲男訳 99) という現象がみられる。19世紀イギリスのブルジョア階級は雑誌の講読を通じて模倣すべき美意識や上品な消費手段、礼儀作法を知り、広告やデパート、オークション、そして上流階級が慈善事業の一つとして手掛けたコレクションの一般公開を通じて上質のワイン、絵画、馬、宝石、オーダーメイドの服、良質なたばこを積極的に収集し、その眼識を高めた。

富と地位を築いたブルジョア階級の男性が愛読した雑誌 (*London Society*, *Cornhill Magazine*, *Graphic*, *Gentleman's Magazine* など) は無教養な男性にたばこにまつわる蘊蓄、たばこの選び方などを教授した⁵。スモーキング・ルームとたばこ屋の店頭に配布されていた小冊子は喫煙の所作ならびにたばこ文化の普及に一役買っていた (4-2-1 に前掲のCope社の小冊子など)。教養と礼儀作法に欠くブルジョア男性にとって雑誌は手軽に効率的に必要な情報と知識を得られる媒体であったことが推測される。

雑誌と新聞記事に掲載された広告は、上流階級に近い暮らし向きと趣味を知るのに効率的であった。長い伝統のなかで宝飾品や調度品を代々受け継ぐ貴族・上流階級はそれぞれ最良の店と関わっており、確立されたライフスタイルを築きあげているので、彼らにとって広告はさほど影響力はなかったはずである。広告が対象とするのはむしろ、裕福だが商品価値に無知なブルジョア階級であり、雑誌に掲載された広告は上品質にこだわるブルジョア階級の心をくすぐるような宣伝で埋め尽くされている。たばこの手回り品についても同様で、*Graphic*の広告商品には複雑な模様が蓋に施されている銀製のシガレットボックス

⁵ 例えば *Gentleman's Magazine* には、医学的な見地からたばこの是非を論じたエッセイ (“Tobacco-smoking”, September 1879)、たばこの歴史についてのコラム (“A Whiff of Tobacco”, December 1890)、文学にみるたばこ文化についてのエッセイ (“Tobacco and Drama”, June 1904) などが載せられてある。*The English Illustrated Magazine* (June 1986) に掲載された“The Ten-shilling Cigar”という記事では、世界でも最高品質のシガーを備えるイギリスにアメリカの億万長者が訪れてシガーを買い求めに来ることや良質なシガーの見抜き方を店主から伝授するエピソードが含まれている。

ス（50本入り）、金で覆われた琥珀のシガレットチューブ（銀製のケース付）、トレイ付の銀製のシガレットケースなどがあり、値段は約17シリング6ペンスから3ポンド7シリングと高価であった⁶。また、広告を掲載した銀製品の店の住所をみれば、ロンドンのメイフェアに近いボンド・ストリートやオックスフォード・ストリートの一角、つまりGeorge IV時代からのダンディのテリトリーと目されてきた地域にあった（山田1989:110）。購読者の多数を占めるブルジョア階級にとってはこうした店が上流階級の間でも利用されていることを知る機会ともなっていたと考えられる。

さらに、雑誌に掲載されたたばこの広告は、生産者に操られた鑑識眼のない受け身の消費者、大量生産の恩恵を受けるだけの無個性の消費者にならないことが、上流階級のジェントルマンへの道であることも示唆している。*Graphic* (March 31, 1900)に掲載された南アフリカ産のシガレット“Guinea-Gold”の広告では「まがい物にご注意」という警告が付されている。同紙には、イースト・ロンドンで葉巻の吸い殻を採集して安価なシガレットに再生産する闇工場があることが報告されているから（Oct.8, 1892）、掲載商品が不純物を含まぬ純然たる商品であることを強調する必要があったのだろう。同じく*Graphic* (January 6, 1900)に掲載された“Carrera's Celebrated Smoking Mixture”という広告では、顧客それぞれのニーズと趣向に合わせて独自のたばこの調合をすること、そしてたばこの品質が極めて高いことを保証している。徹底的に品質にこだわるダンディの姿勢を模倣すべく、ブルジョア階級の男性もまた、品質を鋭く見極め、上質なものを見抜く能力が洗練の証であると考えていた。品質の劣った大量生産の商品を受動的に受け入れる消費者たちとは一線を画すためにも、タバコの葉の産地、調合の方法、生産の過程などを吟味して、上質のたばこを嗜むことに強いこだわりを見せていた。従って、当時の裕福なブルジョア階級のこうした自意識が、たばこの広告にも投影されていたのである⁷。

ブルジョア階級に個人経営の店よりも上質の品物をより機械的に提供したのがデパートであった。1850年代からロンドンと地方都市を中心に続々と展開されたデパートは、衣服や調度品などあらゆるものを展示・提供し、ブルジョア階級のような「派手な消費者（conspicuous consumer）」（Masset 7）に必要な趣味と美意識を金で入手できる便利な場であった。

⁶ この時代の世相を反映した、Arthur Conan Doyle (1859-1930) のSherlock Holmes シリーズの短編“The Yellow Face” (1893) では、Holmes が依頼人のパイプ（当時流行だったブライアー・パイプで、木製の柄と琥珀の吸い口があり、どちらにも銀の帯が巻かれてある）の値段を約7シリング6ペンスと見積もり、所有者が比較的裕福な暮らしをしていることを推察するくだりがある。この点を鑑みても、広告に掲載されている手回り品の値段が高価であることが読み取れる。

⁷ 参照した広告は＜引用・参考文献＞に掲載。

19世紀のイギリス社会にデパートが登場するきっかけとなったのは1851年5月1日のロンドン、ハイドパークで開催した第一回万国博覧会である。同博覧会が、当時のたばこ文化を広く周知する役目を果たしていたことも留意したい。Queen Victoria 夫妻が実現したこの大イベントでは諸外国からの特産品や発明品などが一同に展示されたが、特にイギリスの製品を紹介する目的が強かった。約5か月におよぶ開催期間にはおよそ66万4000人、つまりイギリス国民の4分の1が足を運んだといわれ、その社会的影響力のほどがうかがえる(君塚 167)。万博の公式カタログ (*Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851*) によれば、海外諸国からのさまざまな葉巻、巻きたばこ、スナッフ、たばこ入れ、パイプが展示されていた。シガーは主にポルトガル、アルジェリア、南アフリカ、インドなどの会社から出展されており、シガレットはロシア、スペイン、フィリピン、ポルトガルからのもの、加えてオーストリア製のシガーホルダーなどもあった。万博では黄燐マッチも紹介され、イギリスでその製造工場が増加していることや、マッチの質の良さ、手頃な値段、生産数が柔軟に対応できる点など、黄燐マッチの利点が強調されている。世界でも先駆けて産業革命を体験したイギリスの底力を誇示すべく、機械生産・大量生産を象徴するシガレット・マシンも展示され(1851年6月17日付 *Times* 紙にも特筆されている)、先述したように、Fribourg & Treyer 社の記録ではシガレットが初登場したのが1852年であることから、シガレットの普及にこの万博が貢献したことは想像に難くない。

およそ10万点もの品を一堂に会した万博は物質文化の表象として、入場者の消費欲を掻き立てた。とりわけこの時期に富と力を確立したブルジョア階級にとって、上流階級の趣向を直に見聞きし、結果としてそれを模倣するような商品を手に入れることが望まれるようになり、それがデパートの登場へとつながった。

デパートは日々の生活を忘れる空間、美とエンターテインメント、購買の楽しさ、流行と社会変化を敏感に伝える機能を果たしていた。この頃すでに Harrods、Selfridges、Lewis's (リバプール)、Howells (カーディフ)などの老舗のデパートが開店し、1893年には「ジェントルマン専門の仕立て屋デパート」として Bainbridge's がニュー・カッソルに開店した。同店は競合するデパートにくらべて、質のよい製品を安価で販売し、しかも現金払いを導入したことで、当時世の耳目をひいていた (Masset 9)。図12の Bainbridge's の広告で左から2番目の男性がシガーをくゆらせているように、たばこがジェントルマンに必須の嗜好品であることが示されている。上流階級もデパートを利用していたことが分かるエビ



図 12

ソードのひとつに、Winston Churchill が 6 歳で初めて購入したシガーとシガレットのことがある。彼は当時両親が好んだセント・ジェームズ・ストリートの Robert Lewis にて両親のためにハバナ・シガーと金の吸い口がついた Alexandra Balkan を求めた (Singer 50)。デパートの利点は、「素人の購買者」(Glennie 37) が、まがい物や劣悪な

商品を買うリスクがなく、良品質の商品を容易に入手でき効率的であるという点がある。個人が経営する店に足を運ぶにはそれなりの知識と鑑識眼が必要とされ、成り上がりのブルジョア階級にとってはなかなか敷居が高かったのに対し、デパートはあらゆる人を迎え入れるだけでなく、彼らが安心して購買できる場を提供した。

ダンディの所持品が後世のダンディや裕福なブルジョアへ受け継がれていた手段にはオークションがあり、美しい物を通して、他者と歴史を語り、感動を共有する機会ともなる。アンティーク大国のイギリスでは、現在までオークションという手段でもって価値ある美術品・芸術品が大切に保存されてきたが、このことはダンディの所持品についても同様である。Brummellが借金取りに追われて 1816 年 5 月 18 日に夜逃げする形でフランスに亡命すると、5 月 21 日付の *Times* にはその資財がオークションにかけられることが宣伝された。これを聞きつけて、イギリス貴族社会の中でも洗練を極めた人々が Brummell の所持品を求めて集まり、当初は 2 日間と予定されていたオークションは初日の数時間で終了した。陶器製品、フランス製家具（ブール象嵌）、書籍（英・仏・伊）、絵画、食器、ワインなど、どれも大変趣味のよい上品なもの、とこの宣伝文にあるが、たばこの手回り品も含まれていたかは定かではない。ただし、その中には摂政皇太子（後の George IV）に渡す予定、というメモの入ったスナッフボックスも含まれていたという（生田 81、Kelly 324-344）。20 世紀になっても、彼の遺品の「ごくありふれたメモ帳」が £15,000 で個人コレクターに落札されたというから（Norman 2）、ダンディの元祖としての Brummell のカリスマ性と影響力の大きさがうかがえる。さらに、Brummell に劣らず、スナッフのコレクターとして名高い George IV と Lord Petersham の壮麗なスナッフボックスのコレクション

ョンは、同王がパトロンであったFribourg & Treyerによって管理されたといわれている(Apperson 100)。Lord Petersham (1780-1851) もフランス・セーブル焼きのスナッフボックスのような非常に珍しいボックスの持ち主として有名であった(Apperson 100)⁸。

上流階級がたばこ文化の普及のために、慈善事業のようなかたちで自らのたばこコレクションを一同に展示したことも、ブルジョア階級への教養と嗜好の教育的効果を果たしていた。上流階級のジェントルマンが個人的な趣味で収集したたばこに関する資料や手回り品は往々にして非常に高価なコレクションであるが、大衆が実際に見る機会が積極的に提供された。例えば、イギリスではAlderman William OrmerodのTodmorden Library、アメリカではGeorge Arentsによるコレクションが有名である。後者は18言語による約4,500点ものたばこについての書籍(主に17~19世紀に出版された古書)でニューヨーク市立図書館に寄贈された。その総額について問われたArentsは、それがあくまでも個人的な楽しみで行ったものである以上、金額に換算するのは控えたいとし、個人のコレクションが社会貢献の一端を担うことを強く望み、特にアメリカ人の歴史教育を深めるために彼の収集した本が役立つことを希望した(“Books on Tobacco Shown at Library”, “Tobacco Library”)。New York Timesには、寄贈を伝える記事が何度も載せられ、大掛かりな宣伝活動を通してたばこに関する知的財産の大衆への還元が行われていたことがうかがえる。同様のことは、イギリスのOrmerodによる活動でもみられた(Hilton 31)。イギリスでは当時、美術館を無料で開放し貧しい人々に教育と余暇、娯楽を提供しようとした社会主義的な運動も盛んで、上流階級によって収集されたたばこコレクションもそうした大衆への教育的材料のひとつとして機能していたことが推察できる。美術館や図書館という公的な劇場的空間にたばこのコレクションが展示されるという絵図は、本研究が着目したダンディズムの劇場性、つまり衆人の目に美のモデルを晒し、憧れの対象を形成しようとする姿勢とも関連付けることができる。

特権階級に属する者が私的財産を社会に還元することでイギリス社会全体のための教育の一助となるべきだという理念は、ダンディズムの特徴の一つといえるだろう。ファッションのご意見番であったBrummellもその著書*Male and Female Costume* (1822)の中で19世紀までの衣装の歴史をたどりながら、「衣装の原則」という教育的な章を記している。衣装とは建築や造園技術と同じ芸術作品として人に感銘を与えるものであるから、高貴な者は、(古代ローマ貴族と同じように) ひだのついたゆったりした服を着るようにし

⁸ スナッフボックスの価値は後世にも高く評価され、1956年7月9日に開催されたサザビーズのオークションの目玉は18世紀のスナッフボックスであった。その中には金製でオルゴールと時計、カギがついたスイス製のスナッフボックスまである。こちらは当時150ポンドという高値で入札されている。このようにオークションという手段を通じて嗅ぎタバコは現代になってもひとつの芸術・美術品としての価値が高い。

て、身体にぴったり過ぎる服は下層階級の労働者の利便性のためのもので、と論じている (Brummell 129)。ダンディ作家Wildeにも無教養な大衆への教育的態度がみられ (Weliver 332)、彼は大衆という没個性の集団に対してダンディとしての自分のように特異な個人たれ、と教育し導こうとした (輪 湖 65-73)。Wildeがアメリカにて行った講演の原稿は、当時のイギリス中産階級向けのマニュアル本、特に室内装飾に関する教則本 (William John Loftie, *A Plea for Art in the House*, 1878) と婦人服に関する教則本 (Mary Eliza Haweis, *The Art of Dress*, 1879) の影響を受けており、これは当時のエリート主義的な唯美主義 (芸術家の創造性に個性の発露を見る) と大衆的な唯美主義 (大衆の消費活動に個性の表明を見る) が融合している点で興味深い (輪 湖 65-73)。各家庭の室内装飾はその家に住む住人の個性 (the distinct individuality) が表現されているべきだと言うWildeの主張では、個性の問題の視座が従来の芸術家の創造性から消費者各個人の個性と行動に移動しており、エリート的、孤立した芸術家とは対立しているはずの、名もなき大衆一人一人がいかにして消費を通じて自己表現の可能性を探ればよいのかを啓発しようとする意図が込められている。彼が没个性的とみなされていた大衆を、趣味の良い個性ある特異な一個人 (ダンディ) にしようという教育的メッセージを込めていたことが読み取れる。

5. 引用・参考文献

<図版出典>

- 図 1. Roberts, Jane, ed. *Royal Treasures: A Golden Jubilee Celebration*. London: Royal Collection, 2002. p.329.
- 図 2. Roberts, Jane, ed. *Royal Treasures: A Golden Jubilee Celebration*. London: Royal Collection, 2002. p.331.
- 図 3. Crossman, John. *The Smokin' Book of Cigar Box*. East Petersburg, 2012. p.75.
- 図 4. 『「Story of ...」カルティエクリエーション〜めぐり遭う美の記憶』東京国立博物館、2009年. p.91.
- 図 5. *Max Beerbohm Caricatures*. Ed. N. John Hall. Yale UP, 1997. p.22
- 図 6. Oscar Wilde and Lord Alfred Douglas', in *Max Beerbohm Caricatures*, Ed. N. John Hall. New Haven: Yale UP, 1997, p.23
- 図 7. Top Hat. V&A. British Galleries, London. Personal photograph by author. August 2013.
- 図 8. *Max Beerbohm Caricatures*. Ed. N. John Hall. New Haven: Yale UP, 1997, p.220.

- 図 9. Scott, Amoret, and Christopher Scott. *Smoking Antiques*. Bucks: Shire, 1981. p.5.
- 図 10. Girouard, Mark. *Life in the English Country House*. New Haven: Yale UP, 1978. p.189.
- 図 11. Lejeune, Anthony. *The Gentlemen's Clubs of London*. London: Stacey International, 2012. p.76.
- 図 12. Masset, Claire. *Department Stores*. Oxford: Shire Library, 2013. p.9.

<引用・参考文献>

- 生田耕作『ダンディズム—栄光と悲惨』中公文庫、1999.
- 君塚直隆『ジョージ四世の夢のあと』中央公論社、2009.
- 祥伝社新書編集部編『グレート・スモーカー』祥伝社、2006.
- 『「Story of ...」カルティエクリエーション〜めぐり遭う美の記憶』東京国立博物館、2009.
- たばこと塩の博物館編『嗅ぎたばこ入れ』たばこと塩の博物館、2013.
- 『特集 オスカー・ワイルド』『ユリイカ』第8巻5号、青土社、1976.
- 中野香織『ダンディズムの系譜：男が憧れた男たち』新潮社、2009.
- 日本嗜好品アカデミー編『煙草おもしろ意外史』文春新書、2002.
- 森護『英国王室史話』中公文庫、2009.
- 山田勝『ダンディズム 貴族趣味と近代文明批判』日本放送出版協会、1989.
- . 『イギリス貴族 ダンディたちの美学と生活』創元社、1999.
- 輪湖美帆「<芸術家>としての消費者—Oscar Wilde のアメリカ講演（1882年）における室内装飾・服装マニュアル本の影響を中心に」『英文学研究』IV (2011): 65-73.
- 和田光弘『タバコが語る世界史』山川出版社、2010.
- ソースティン・ヴェブレン『有閑階級の理論』高哲男訳、ちくま学芸文庫、2009.
- フセヴォロド・オフチニコフ『檜の根 イギリスとイギリス人』中川研一訳、サイマル出版会、1980.
- ギリエルモ・カブレラ＝インファンテ『煙に巻かれて』若島正訳、青土社、2006.
- D.・キャナダイン『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2011.
- リチャード・クライン『煙草は崇高である』太田晋・谷岡健彦訳、太田出版、1997.
- ロジェ・ケンプ『ダンディ：ある男たちの美学』講談社現代新書、1989（1977）.
- ヴォルフガング・シヴェルヴシュ『楽園・味覚・理性 嗜好品の歴史』福本義憲訳、法政大学出版局、2007.

- アルフレッド・H・ダンヒル『ダンヒル たばこ紳士』團伊玖磨訳、朝日新聞社、1968.
- コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの回想』駒月雅子訳、角川文庫、2013.
- J・E・Brooks 編『Arents 文庫世界たばこ文献総覧』TASC 翻訳委員会訳、たばこ総合研究センター、1992-1998.
- Adams, James Eli. "The Hero as Spectacle." *Victorian Literature and the Victorian Visual Imagination*. Ed. Christ, Carol T. and John O. Jordan. Berkeley: U of California P, 1995. 213-229.
- Apperson, George Latimer. *The Social History of Smoking*. Carolina: Biblio Bazaar, 2007.
- Arents, George. *Tobacco*. New York: Rosenbach, 1937-52.
- Ashley, Peter. *The Cigarette Papers*. London: Frances Lincoln, 2012.
- Atkinson, G. T. "Oscar Wilde at Oxford." *Cornhill Magazine* (May 1929): 559-64.
- Baker, Kenneth. *George IV: A Life in Caricature*. London: Thames & Hudson, 2005.
- Barbey d'Aureville. *Du dandysme et de George Brummell*. 1845. Paris: Rivages poche, 1997.
- Baudelaire, Charles-Pierre. *L'Art Romantique*. Paris: Louis Conard, 1917.
- Beerbohm, Max. *The Works of Max Beerbohm*. London: John Lane, 1896.
- . *Max Beerbohm Caricatures*. Ed. N. John Hall. New Haven and London: Yale UP, 1997.
- "Beau Brummell." *Times* 7 January, 1830: 3.
- "Beau Brummell Notebook Makes £ 15,000." *Times* 2 May, 1975: 2.
- "Books on Tobacco Shown at Library." *New York Times* 19 Jan. 1944: 14.
- Botz-Bornstein, Thorsten. "Rule-following in Dandyism: 'Style' as an Overcoming of 'Rule' and 'Structure'." *Modern Language Review* 90:2 (Apr. 1995): 285-95.
- Brooks, Jerome E.. Introduction. *Tobacco. Its History Illustrated by the Books, Manuscripts and Engravings in the Library of George Arents Jr.* Vol. 1. New York : Rosenbach, 1937-52.
- Brummell, Beau. *Male and Female Costume*. 1822. New York: Doubleday, Doran, 1932.
- Bulwer-Lytton, Edward. *Pelham*. London, 1828
- Campbell, Lady Colin. "A Plea for Tobacco." *English Illustrated Magazine* 121 (October 1893): 81-4.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus and On Heroes*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1948.
- Carreras' Celebrated Smoking Mixture. Advertisement. *Graphic* 6 Jan. 1900: 25.

- Cockerell, Hugh. "Tobacco and Victorian." *Clio medica : acta Academia Internationalis Historiae Medicinae*. April, 1998, 89-97.
- Cope's Smoke Room Booklets*. Ns. 1-14. Liverpool, 1889-94.
- Culpepper, Ned. "Mr. Edward Lytton Bulwer's Novels; And Remarks on Novel-writing." *Fraser's Magazine for Town and Country* 1.5 (June 1830): 509-32.
- Dunhill, Alfred H. *The Gentle Art of Smoking*. London: Max Reinhardt, 1961.
- . *The Pipe Book*. New York: Skyhorse, 2011.
- Evans, George. *The Old Snuff House of Fribourg & Treyer at The Sign of The Rasp & Crown, No. 34 St. James's Haymarket, London, S.W., 1720*. London: n.p., 1920.
- Elkington & Co. Ld. Advertisement. *Graphic* 17 Dec. 1900: 755.
- Fairholt, F. W. *Tobacco: Its History and Associations*. London: Chapman and Hall, 1859.
- Feldman, Jessica R. *Gender on the Divide: The Dandy in Modernist Literature*. Ithaca: Cornell UP, 1993.
- Fisher, W. E. Garrett. "The Ten-shilling Cigar." *English Illustrated Magazine* 153 (June 1896): 233-6.
- "The Four Georges." *Cornhill Magazine* 2 (July-December 1860): 385-406.
- Garelick, Rhonda K. *Rising Star: Dandyism, Gender, and Performance in the Fin de Siècle*. Princeton: Princeton UP, 1998.
- Chen, Peh Der. "The Mandrians of Clubland." *Graphic* 15 Feb. 1930: 253.
- "Does Alcohol Act as Food" *Cornhill Magazine* 6 (Sep. 1862): 319-29.
- Giesenhagen, Joe. *The Collector's Guide to Vintage Cigarette Packs*. Atglen, PA: Schiffer, 1999.
- Gilman, Richard, *Decadence: The Strange Life of an Epithet* (London: Secker&Warburg, 1979 [1975]).
- Girouard, Mark. *The Victorian Country House*. Oxford: Clarendon, 1973.
- . *Life in the English Country House*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Greville, Charles F. *A Journal of the Reigns of King George IV and King William IV*. Charleston, SC: Biblio Bazaar, 1874.
- Glennie, P.D., and N.J. Thrift. "Consumers, Identities, and Consumption Spaces in Early-modern England." *Environment and Planning A* 28 (1996): 25-45.

- Goldsmith' & Silversmiths' Company. Advertisement. *Graphic* 19 March 1892: 378.
- . *Graphic* 1 Dec. 1900: 813.
- "The Great Exhibition." *Times* 17 June 1851: 5.
- "The Great Exhibition." *Times* 8 July 1851: 3.
- Grylls, David. "Smoke Signals: The Sexual Semiotics of Smoking in Victorian Fiction." *English* 55 (Spring 2006): 15-35.
- Hall, Kenneth E. "Dandyism and *Holly Smoke*." *Hispanofila* 111 (May 1994): 73-81.
- Hatton, Joseph. "A Tobacco Factory." *English Illustrated Magazine* 100 (Jan. 1892): 299-306.
- Haweis, Mary Eliza. *The Art of Dress*. London, 1879.
- Hilton, Matthew. *Smoking in British Popular Culture 1800-2000*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- How, Harry. "The Biggest Tobacco-Box in the World." *Strand Magazine* 8 (Aug. 1891): 465-76.
- Jesse, Captain William. *The Life of George Brummell. Esc., Commonly Known as Beau Brummell*. 1844. 2 vols. London: Navarre Society, 1924.
- Kelly, Ian. *Beau Brummell: The Ultimate Dandy*. London: Hodder, 2005.
- Kent, Philip. "A Whiff of Tobacco." *Gentleman's Magazine* 269 (December 1890): 575-81.
- Kerr, Robert. *The Gentleman's House*. London: John Murray, 1871.
- Klein, Richard. *Cigarettes Are Sublime*. Durham and London: Duke UP, 1993.
- "The Late Tobacco Scheme Would Have Answer'd the End Proposed." *Gentleman's Magazine* 3 (Aug. 1733): 419-20.
- Lawson-Tancred, M. "Eccentricities of English Dress." *Cornhill Magazine* 66 (Jan. 1929): 52-61.
- Lejeune, Anthony. *The Gentlemen's Clubs of London*. London: Stacey International, 2012.
- "Local Intelligence." *Sheffield Daily Telegraph* 23 May 1874: 10.
- Mappin & Webb's. Advertisement. *Graphic* 27 Nov. 1886: 582.
- . *Graphic* 19 Jan. 1895: 72.
- "Marmaduke." "Court and Club." *Graphic* 21 Nov. 1896: 642.
- Mills, Victoria. "Dandyism, Visuality and the 'Camp Gem': Collections of Jewels in Huysmans and Wilde." Eds. Luisa Calé and Patrizia Di Bello. *Illustrations*,

- Optics and Objects in Nineteenth-Century Literary and Visual Cultures*. London: Palgrave Macmillan, 2010.
- Masset, Claire. *Department Stores*. Oxford: Shire Library, 2013.
- Moers, Ellen. *The Dandy: Brummell to Beerbohm*. Lincoln : U of Nebraska P, 1960.
- Norman, Geraldine. "Beau Brummell Notebook Makes £ 15,000." *Times* 2 May 1975:2.
- Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition*. London: Great Exhibition, 1851.
- Ogden's Guinea-Gold Cigarette. Advertisement. *Graphic* 31 March 1900: 475.
- "On the Praise of Tobacco." *Gentleman's Magazine* 5 (January 1731): 731.
- "On Tobacco." *Gentleman's Magazine* 16 (July 1746): 377.
- "A Plea for Tobacco." *English Illustrated Magazine* (Oct. 1893): 81-84.
- Parissien, Steven. *George IV*. New York: St. Martin, 2001.
- Priestley, J. B. *The Prince of Pleasure and His Regency 1811-20*. London: Sphere Books, 1971.
- Raby, Peter, ed. *Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Ralickas, Eduardo. "Figuring the Artistic Subject: A Genealogy of Nineteenth-Century Dandyism." Ed. Rachael Langford. *Textual Intersections: Literature, History and the Arts in Nineteenth-Century Europe*. New York: Rodopi, 2009.
- Reilly, Andrew, and Sarah Cosbey, ed. *The Men's Fashion Reader*. New York: Fairchild, 2008.
- Roberts, Jane, ed. *Royal Treasures: A Golden Jubilee Celebration*. London: Royal Collection, 2002.
- Rosbach, Susanne. "Dandyism in the Literary Works of Barbey d'Aureville: Ideology, Gender, and Narration." *Modern Language Studies* 29:1 (1999): 81-102.
- "Sales by Auction." *Times* 21 May 1816: 4.
- Scott, Amoret, and Christopher Scott. *Smoking Antiques*. Bucks: Shire, 1981.
- Shepard, Richard. "Tobacco's Road Through History." *New York Times* 24 Aug. 1987): 15.
- Singer, Barry. *Churchill Style*. New York: Abrams Image, 2012.
- "Snuff and Tobacco Relics." *London Daily News* 31 Jan. 1882: 2.
- "The Smoking-Room at the Club." *Cornhill Magazine* 34 (October, 1862): 512-3.
- Snowman, A. Kenneth. *Eighteenth Century Gold Boxes of Paris*. London: Robson, 1974.

- Sotheby & Co. *Catalogue of Important 18th Century Gold Snuff Boxes and Works of Art by Carl Faberge*. London: Sotheby, 1956.
- Stevens, A. M. "Tobacco and Drama." *Gentleman's Magazine* 296 (June 1904): 582-96.
- Streeter & Co. Advertisement. *Graphic* 30 Dec. 1899: 904.
- Thackeray, William Makepeace. 1847-8. *Vanity Fair*. Wordsworth Edition, 2001.
- . "The Fitz-Boodle Papers." *Fraser's Magazine* (1841-42).
- . *Henry Esmond; The English Humourists; The Four Georges*. Oxford UP, 2009.
- . *The Book of Snobs, etc*. London: George Routledge & Sons, 1906.
- Todesco, E. S. Romero. "Nicotiana." *English Illustrated Magazine* 47 (May 1912): 151-8.
- "Tobacco." *Gentleman's Magazine* 1 (September 1731): 383-4.
- "Tobacco: Its Use and Abuse." *Cornhill Magazine* 35 (Nov. 1862): 605-15.
- "Tobacco Library." *New York Times* 31 Jan. 1944: 16.
- "Tobacco-smoking." *Gentleman's Magazine* 245 (September 1879): 350-62.
- "Vast Tobacco Lore Will Go to Public." *New York Times* 19 April 1937: 19.
- Weliver, Phyllis. "Oscar Wilde, Music, and the 'Opium-Tainted Cigarette': Disinterested Dandies and Critical Play." *Journal of Victorian Culture* 15.3 (Dec. 2010): 315-347.
- Wilde, Oscar. *The Woman's World*. London: Cassell & Co, 1888-90.
- . *The Complete Works of Oscar Wilde*. London: Collins, 2003.
- Woolf, Virginia. *Beau Brummell*. New York: Rimington & Hooper, 1930.
- Zieger, Susan. "The Dandy, the Soldier, and the Cigarette: Ouida's *Under Two Flags* and the Late-Victorian Culture of Smoking." *Nineteenth Century Studies* 23 (2009): 87-104.

6. 英文アブストラクト

Dandyism and Tobacco Culture in 19th century Britain

Yoriko IZUMI⁹

Kanshi H. SATO¹⁰

This research examines what kind of tobacco culture flourished and how it interacted with the contemporary vogue of dandyism, whose advocates – dandies – were mostly smokers, in 19th century Britain. We have found that snuff, cigars and cigarettes were the most highly appreciated forms of tobacco by dandies, other aristocrats, and the wealthy middle-class who had emerged to form a new ‘aristocratic’ layer during the industrial revolution, while pipes were regarded as vulgar by these same groups although some often enjoyed privately puffing away on a pipe.

Dandies in the first half of the century (George Brummell, George IV, and Edward Bulwer-Lytton) preferred snuff having been influenced by elaborate French court mannerisms, while many of those in the second half of the same century (Oscar Wilde, Max Beerbohm and Winston Churchill) preferred cigars and cigarettes that were manufactured en masse.

Tobacco and its associated paraphernalia, such as boxes and matches, are examined here to demonstrate that tobacco did not only provide recreational pleasure but also served as a symbol of one’s social status, wealth and aestheticism of the times. The significant social roles of the place where dandies gathered and smoked – clubs and smoking-rooms, were also examined. The research further highlights the instructive role of tobacco and tobacco-related items printed in magazine advertisements, and displayed in public exhibitions and department stores, which enabled the bourgeois middle-class to become as refined as the elitist dandy.

⁹ Meiji University

¹⁰ International University of Health and Welfare

